

現論
げんろん

やなぎだ
くにお
柳田 邦男氏

ケータイ・ネットの普及がめよつと思つてもやめられな子どもの人格形成に破壊的ない。やめよつとすると不機嫌役割を果たしていることについて、私はこの10年余り著作や講演を通じて警鐘を鳴らし続けてきた。その危機がスマホ（スマートフォン）の登場や新しいコミュニケーションの方法（アプリ）の普及で一段と深刻化してきた。ネットによる危機が新段階に入ったといえる。

新たな温床

最近、各地でスマホなどで使える無料通信アプリLINE

厚生労働省研究班（代表＝大井田隆・日大教授、公衆衛生学）の中高校生対象の全国調査（2012年10月～13年3月）によると、ネットにひたっている時間は5時間を超えている生徒は、中学生で9・0%、高校生で14・4%にも上る。学校外での生活時間の大半をパソコン、スマホ、ケータイなどに熱中しているのだ。

そして「病的な使用」という状態に陥っている中高生が8・1%もいる。これを全国の中高校生全体に当てはめて計算すると、実に51万8千人にもなるのだ。具体的には、や

面倒なこと自分の手で

される。すぐに返事をしない、極端に少なくなり、相手の表情などから心を読み取るコミュニケーション力が育たない。そこでたとえ深夜でもやりとりを続けたいわけにはいかなくなる。誰かがいじめの標的にされると、その1人を交信仲間から排除して、仲間内で誹謗中傷の言葉をやりとりする。排除された者や、知らないうちに中傷されていた者は、ショックを受け、落ちこんだり不登校になったりする。はやくから問題になった学校裏サイトへの誹謗中傷の書き込みは、監視組織によるチェック体制ができていて、依然としていじめの舞台になっている。LINEは、そういう第三者の監視の目を入れることのできないシステムになっているので、いじめや犯罪の新しい温床になっているのだ。

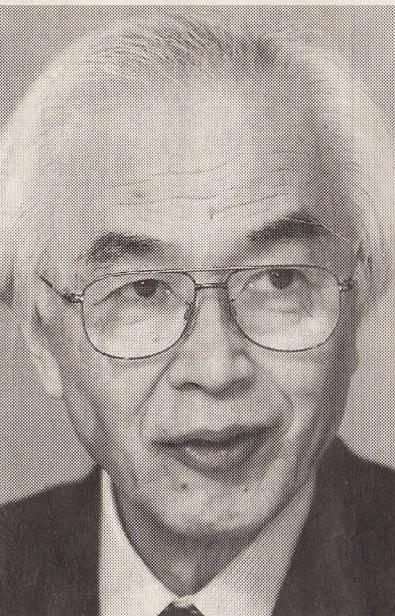
使わぬ目を

これら問題が、スマホの登場以降、いちだんと深刻化してきたといえよう。今や幼児におもちゃ代わりにスマホやタブレット端末を与える親が増えているのを見ると、私は慄然とする。

私は10年ほど前から、精神医学者の見解やネットのからむ犯罪事件の分析から、ケータイ・ネット社会の負の側面として、次のような点を指摘してきた。

①現実の人間同士の接触が

そ、全国の小中高校は保護者と一体となって、週に1日プラス年に1回1週間通しの「ノーメディアデー」を実践して、ライフスタイルを見直すべきだろう。さらに政府は、幼児にスマホなどを与えるのは、麻薬を与えるに等しいという育児ガイドブックをつくるべきだ。



大東を36年栃木県生まれ。東大経済学部卒。NHK記者を経て作家活動に。災害、事故、科学、医療問題などをテーマに執筆。著書は「マツハの恐怖」など多数。

(ノンフィクション作家)